

国語

現代文領域（近代以降の文章）

（六〇分）

一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

私は自分の身体の一部を見ることができ、その身体部位を自分のものとして自己帰属させることができる。しかしながらデカルトは、自己の本質は、身体から独立した精神実体にあると主張した。デカルトにとっては、身体は自己の本質をなさない。そうしたデカルトの自己は身体を持たないがゆえに見られることがない。近代の a 的な哲学は、人間の心を自分は見ることがあっても、自分が見られることのない純粹な主観として想定する。そうした心は、世界を一方的に認識する「超越論的主観」と呼ばれ、とくにカント以降の主観主義の根本仮説となってきた。デカルトの考えを受けついで近代的な主体の概念には、見られるという受動性が欠落し

ている。

しかし、実際には私たちは、見る存在であると同時に、見られる存在である。こうした他者の視線と自己の存在との独特の関係を表現しているのが、スペイン・バロック期の画家であるデイエゴ・ヴェラスケスが描いた「宮廷の侍女たち」である。ヴェラスケス（一五九九―一六六〇）は、デカルト（一五九六―一六五〇）と同時代の人物であり、この絵はスペイン国王フェリペ四世とマリアーナ王妃の王女と侍女たちを描いた一六五六年の作品である。現在は、マドリッドのプラド美術館で鑑賞できる。

この絵を鑑賞する人は、絵の前のある地点に立つと不思議な効果が現れることを実感する。中央の少女である王女や、その周りの侍女たち、画家（ヴェラスケス本人だと言われている）の視線が絵の外の一点に集中して

り、その場所に鑑賞者が立つと自分が絵画の中の人物に見つめられているように感じる。そして、さらに絵をよく見るならば、奥の鏡の中に、小さくぼんやりと国王と王妃の姿が映っていることが分かる。鑑賞者が立った地点は、国王と王妃がいるはずの場所であり、そこに立った者は絵画のなかの鏡に映ることになる。鑑賞者は、王と王妃の位置に立つて絵画の外にいるのだが、画中人物の視線を集め、その姿は絵画の奥の鏡に映っている。この絵は、絵の外にいる者を、描かれた人物たちの視線と鏡によっておのれの内部に取り込むのである。

筆者は実際にこの絵の前に立ったときに、その集中する侍女たちの視線のせいで、あたかも絵が延長してきて、自分が絵画空間のなかに包み込まれたような印象を受けた。絵画の空間が前方に伸び、自分までその絵画の中に入ったかのように感じた。奥行きがうまく表現されている絵画はたくさんある。ヴェラスケスの同時代の画家たちも、そうした絵画内の奥行きを描く技巧にかけてはヴェラスケスに負けてはいない。しかしそれらの絵は、額縁のところで現実とくっきり隔てられている。奥行きは絵画の中にしかなく、絵画は現実の世界の一隅を占める小さな平面上にすぎない。これに対してヴェラスケスは、画中人物の視線によって、前方にせり出してくる奥行きを作り出した。絵が自分の空間を拡張し、現実の世界のなかに浸潤しているのである。

デカルトの自己は身体から切り離され、物質の世界とは別の世界に属している。それは、あたかも絵画世界の外にいて、外部から絵画世界をひた

すら眺めるだけの鑑賞者のようである。デカルトの自己は、絵画「世界」からの影響を受けない。他者から見られることがない。しかし、「侍女たち」の目の前に立ち、絵画中の人物に他ならない彼女たちの視線を浴びたとき、鑑賞者は自分が絵画空間に入ったように感じる。私は、他者からの視線によってその空間へ参入できるのである。私たちは、見られることによって自己の存在を世界のなかに確立する。デカルトとその後継者が決して思いつかなかった真実を、ヴェラスケスは描いた。

現象学者のモーリス・メルローポンティは、見られる身体をテーマとして論じる手前までいっていた。彼は、「眼と精神」という絵画論の中で以下のような、アンドレ・マルシャンという画家の興味深い発言を取り上げている。

森のなかで、私は幾度も私が見ているのではないと感じた。樹が私を見つめ、私に語りかけているように感じた日もある……。私は、と言え、私はそこにいた、耳を傾けながら……。画家は世界によって貫かれるべきなので、世界を貫こうなどと望むべきではないと思う……。私は内から浸され、すっかり埋没されるのを待つのだ。おそらく私は、浮かび上ろうとして描くわけなのだろう。

ちょうど侍女たちに見つめられることによって鑑賞者がヴェラスケスの絵画の中に住まうように、森に見つめられると感じることは、自分が「森

に見られる」ことによって森という空間あるいは場所に居場所を見つけ、森の中に存在するひとつの **b** 的存在として自分を位置づけられることである。しかし、「森に見られる」とはどのようなことであろうか。眼のない樹木がどのように私を見るのか。

こう解釈できるのではあるまいか。私が樹木から見られるということは、他者の顔に共感して自分を見る眼とその視線を理解したように、私は樹木たちに共感し、その樹木たちの視点から自分を捉えたのだ、と。しかし樹木に共感するとは、どういうことか。それは、私が他者の身体と自分の身体を重ね合わせたように、**②** 樹木と自分の身体を重ね合わせることである。

森が見るとか、樹木が見るとか、樹木と身体を重ね合わせるといったことでの表現は、^{注6} アニミスティックで神秘主義的に思われるかもしれない。人間である私は、動物でさえない植物と、どのように身体を重ね合わせるというのか。樹木は見ることがない。そもそも眼がないのだから。こう私たちは考える。しかし、どうして私たちは、眼があれば他者が見ていると思うのだろうか。他者の視線とは何であろうか。他者の眼、丸く白い球体の真ん中に色の濃い小さな皿のようなものが存在して、左右上下に動いているというだけで、なぜ私は見られることを理解できるのであるか。他者が視覚をもつことを私たちが認めるのは、彼らに眼があるからだけではない。他者の視線を理解するとは、見ている他者の身体に共感し、その見るという行為、そのひとが首を向け、眼を向けて、眼を凝らし、焦点を合わせている様子と見えている光景の関係を理解することである。他者の

いなければならぬ。その対象が死物・無機物であってもである。身体のない精神にはこの運動的な対象の把握ができない。

描こうとする対象に見られなければ、画家はその対象が息づいている世界に入れない。 **X**、私が見られるためには、私は精神ではなく、身体でなければならぬ。私が見られるということは、私が視覚的であることである。私たちは対象から反射してきた光を浴びることで見える。逆に、他者の眼は、私から反射する光線を使って見る。他者が私を見るとは、他者が私の身体から反射した光を浴びることである。他者はさまざまな場所から自分のところに集まってくる光、すなわち、包囲光を浴びている。私が周囲のどの場所も見ることができるといことは、それらすべての場所から光を浴びているということである。その可能な視線である包囲光の一部に眼を向けて、選択的にその光を眼に受ける。他者は私からやってきた光線に眼を向けることによって私を見る。^③「樹木が自分を見ている、私は樹木から見られている」と感じることは、樹木が私の身体から反射した光を浴びていることを知覚することである。

だが、私はどのようにして、私から反射した光が樹木を照らしていると知ることができるのだろうか。それは、ひとつには、私が樹木を見ることができるといことである。私が見ているときには、樹木と私は相互に光を反射しているはずである。その反射しあう光を利用して、私と相手は相互に見られる。したがって、森の中で樹木が私を見ているという経験は、森の中の私の可視性と森の樹木の可視性を経験するということである。

身体は運動や表情を、自分の **c** 的な運動感覚によって理解することが他者理解である。

見ることは動きなのだ。見ることも行為であり動作なのだ。とするならば、樹木が見ていると感じるのは、こういうときなのだと考えられないだろうか。それは、樹木が下から上にのびていく成長と、風がその成長に加える圧力が枝と幹の形に痕跡を残し、今しがたわずかに枝が蠢き、幹に何かが流れる音がかすかに聞こえ、枝が風になびき、葉が舞い落ちる様子を、私たちが自分の運動感覚によって捉えたときなのである。樹木をひとつの運動体として捉えたときに、私たちは樹木の知覚を知る。そして、樹木が見ている経験とは、そうした運動体が私に関心を持ち、私に向けてさまざまな見る仕草を向けているかのように感じることである。樹木が私の存在に関心を持つと感じるとは、私が樹木に与える影響を知っているということである。それは、樹木にとつての私の持つ ^{注7} アフォーダンスを知ることである。

メルロ＝ポンティは、マルシャンの経験を、世界の外に立つデカルト的な純粋主観には絵画が描けないことの証左として取り上げた。メルロ＝ポンティによれば、画家は身体で描くのであり、精神が絵を描くことなどありえない。絵画を描くために必要なのは、マルシャンによれば、描く対象から自分が見つけられることだ。そのためには、まず見られる身体をもっていないければならぬ。純粋精神は、定義上、不可視である。第二に、対象が私を見つめていると感じるためには、その対象を運動感覚的に捉えて

私は誰にでも見える。樹木がこちらに関心を持つならば、私は樹木にも見えるはずなのだ。

そうしたことをあまりに強烈に感じているのは、おそらく統合失調症の患者たちではないだろうか。統合失調症の患者は、いつも誰かが自分を見ていると感じてしまい、その視線がどこにでもあるという注釈妄想をもつことがある。この妄想は、自分の可視性、すなわち、自分は潜在的に誰にも見られる対象であるという事実を、いつでも顕在的に誰かに見られている事態と取り違えることから生じる。ここには、「見られる」という潜在性(可視性)と「現に見られている」という顕在性との取り違えが存在する。潜在的なものである可視性が、現に見られているという顕在的な被視性に置き換わってしまった。

Y、現に見られていることと見られる可能性との違いはどこにあるのだろうか。もちろん、他者が私を見ているという事実を確認することによってである。しかし、自分が見られているという事実は、そここに存在する。現に私は、さまざまな人たちから見られている。注釈妄想の患者は、こうして拡散して存在している「見られている」という事実をひとつの潜在的な観察者、すなわち、誰か謎の観察者がつねに私を見ているという想念に置き換えてしまうのかもしれない。

私は、森の中で、森の樹木や生き物の関心の対象となることで見られる存在となる。樹木たちと「見る」見られるの **d** 的な関係を作ることによって、画家は森の一部となった。世界に見られることによって、私

は世界の中に入ることができる。それがマルシャンの言う「世界に貫かれる」ということであり、「世界にすっぽり埋没する」ということである。

もし樹木が視覚をもつのであれば、樹木は、鏡でも見るように画家を見て、自分が見ることのできない自己を見ようとしているはずだ。樹木を描いた絵画とは、樹木が画家という外部の回路を通して、おのれ自身を見たときのヴィジョンだと解釈できないだろうか。それは、観察者を通して自己を自己たらしめようとするのである。画家は、樹木の自己認識のための媒体であり、道具である。画家が「浮かび上ろうとして描く」のは、絵画を描くことによって樹木の自己認識を完成させてやり、樹木の視線から解放されるためである。この意味で芸術は、自然の自己表現の延長なのだと言えよう。

鑑賞者は侍女たちに見られることによって、ヴェラスケスの絵画に入り、王の役割を果たすことで、その絵を完成させる。画家は樹木に見られたからこそ、森に住まうことができ、樹木の自己認識を完成させた。自然の美的な体験とは、自分を自然の一部として感じること、Z、自然を礼賛する作家たちがいう「交感(あるいは、万物照応、correspondences)」の経験である。だが、それは自然から自分が見られることによってしか成り立たない。すなわち、自然を身体で経験するだけではなく、自分が、自然の側からの、樹木の側からの、野生動物たちの関心の対象となり、それらから見つめられなければならない。そうでない限り、自然のなかに入ることはできず、自然との一体感を得られない。「画家はその身体を世界に

貸すことによって、世界を絵に変える」というのは、私の身体が描こうとする対象から取り憑かれるからである。対象から取り憑かれるということは、私が対象に共振し共鳴していることを裏側から述べている。そうした共鳴が可能になるには、私は対象を運動体として捉えていなければならない。

こうして、自分の周りにおける存在を運動体としてダイナミックに捉えることができる者、そして自分自身も世界と同じ物で出来ている者、そして周囲に存在する諸事物たちの関心の対象となる者、これらの者が見られる者である。精神はこうした存在には決してなりえない。

(河野哲也『境界の現象学』による)

注1 デカルト——一五九六—一六五〇、フランスの哲学者、数学者、近世哲学の祖。

注2 カント——一七二四—一八〇四、ドイツの哲学者。

注3 デイエゴ・ヴェラスケス——一五九九—一六六〇、スペイン絵画の黄金時代であった一七世紀を代表する画家。

注4 モーリス・メルロ＝ポンティ——一九〇八—一九六六、フランスの哲学者、現象学者。著作に『知覚の現象学』『眼と精神』など多数。

注5 アンドレ・マルシャン——一九〇七—一九八七、フランスの画家。光と自然を探究し、対照的な色彩と装飾的な画風を持つ。

注6 アニミスティック——精霊崇拜的。アニミズムを信奉するさま。
注7 アフォーダンス——環境に実在する動物がその生活する環境を探索することによって獲得できる「意味／価値」のこと。アメリカの知覚心理学者ジェームズ・J・ギブソンによる造語。

1 空欄 a d に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|---|--------|--------|------|------|
| ① | a 主観主義 | b 可視 | c 内 | d 循環 |
| ② | a 可視 | b 客観主義 | c 循環 | d 外 |
| ③ | a 主観主義 | b 循環 | c 外 | d 可視 |
| ④ | a 循環 | b 主観主義 | c 内 | d 可視 |
| ⑤ | a 客観主義 | b 可視 | c 外 | d 循環 |

2 傍線部①「自分までその絵画の中に入ったかのように感じた」とあるが、それはなぜか。この理由の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 絵画の空間が四方八方に延長してきて、見る者を現実からはつきりと切り離し、絵画という幻想世界へと引きずり込もうとするから。
- ② 鑑賞者は絵画の奥の鏡の中に映る国王と王妃がいるはずの場所に立たされ、同じ額縁内に閉じ込められたような錯覚を起こすから。

3 傍線部②「樹木と自己の身体を重ね合わせる」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 樹木の眼に見えない精霊の存在を、私が「肌で感じる」という身体感覚によって捉えているということ。
- ② 樹木の成長過程や葉が舞い落ちる様子を、私が「見る」という運動感覚によって理解するということ。
- ③ 樹木から「見られている」と感じるのは、私たちが眼のない樹木を空間的に捉えているということ。
- ④ 樹木からは私を見ることはできないが、私が樹木に直接触ることによって内的な運動体として認識するということ。
- ⑤ 樹木の視線は直接的なものではないが、私が感覚的に共感することによって認識しているということ。

4 空欄 X Z に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① X むしろ Y ただし Z まず
② X しかし Y まず Z ただし
③ X よって Y しかし Z すなわち
④ X まず Y むしろ Z すなわち
⑤ X ただし Y すなわち Z まず

5 傍線部③「樹木が私の身体から反射した光を浴びていることを知覚する」にはどうするべきだと筆者は述べているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 樹木に見られるためには、反射的に私が樹木を見えるという自覚をしっかりと持ち、樹木という対象を直観的に心で捉えるべきである。
② 樹木は無機物であるが、その眼に見えない視線をはつきりと享受するには、私自身も鋭い精神を常に鍛えておかなければならない。
③ 樹木の眼に見えない精神世界に飛び込むためには、現実にとどまることなく、別次元へと自分自身の心の光を解き放つ必要がある。
④ 私から反射する光を遮って樹木が私を認識できるように、常に私自身の周囲に集まるすべての包囲光を蓄えておく必要がある。

⑤ 私と樹木との両者の可視性を経験するには、森の中で見られていると自覚し、両者が互いに関心を持たなければならない。

6

傍線部④「観察妄想の患者は、こうして拡散して存在している」見られている」という事実をひとつの潜在的な観察者、すなわち、誰か謎の観察者がつねに私を見ているという想念に置き換えてしまうのかもしれない。」とあるが、どういうことか。この筆者の主張の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 自分は誰にでも見られる対象であるという潜在的な可視性が、現に見られているという潜在的な被視性に置き換わってしまっているということ。
② 私が現に樹木に関心を持っているという潜在的な可視性が、現実には私が森を見ているという潜在的な被視性に置き換わってしまっているということ。
③ いつも誰かが自分を見ているかもしれないという潜在的な被視性が、現に見られているという潜在的な可視性に置き換わってしまっているということ。
④ 森が現に私を見ているという潜在的な可視性が、私が森に見られる対象であるという潜在的な被視性に置き換わってしまっているということ。
⑤ 芸術が自然の自己表現の延長であるとすれば、画家が自然と交感するためには、自然から見られることによってしか成立し得ない。私たちは全身全霊で自然と向き合うことで、自ずと見つめられる存在となるのである。

⑤ 樹木がこちらに関心を示しているかもしれないという顕在的な被視性が、樹木が私を現に見ているという潜在的な可視性に置き換わってしまっているということ。

7 本文の内容の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① ヴェラスケスの絵の功績は、絵画内の奥行きを非常に技巧的に描いたばかりではなく、そうした幻想世界を飛び出し、現実世界の一端を平面的に描き、鑑賞者を別次元の精神世界の真実へと包み込んだことである。

② 樹木は眼を持たない。しかし、森の中に立つと私たちは森に見られている、守られていると感じる。それは両者が身体的ではなく、精神的に共鳴しているからであり、私たちにはそうした自然と一体となる感覚を生来潜在的に所持しているものである。

③ デカルト的自己には絵画Ⅱ世界からの影響というものがなく、他者の視線というものが存在しない。身体から切り離され、自分自身が見ることはあっても他者からの視線の欠落によって絵画空間へは参入できない現実世界からの鑑賞者であると主張する。

④ 自分が他者の心を見ることはあっても、自分が他者から見られることはないという、世界を専一的に支配する近代哲学の概念には、当時は知り得なかった「見る」「見られる」という能動性と受動性の線

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

一

源作の息子^{注1}が市の中学校の入学試験を受けに行っているという噂が、村中にひろまった。源作は、村の貧しい、等級割^{ばいじやうわり}一戸^{いこ}前も持っていない自作農だった。地主や、醤油屋の坊っちゃんたちなら、東京の大学へ入っても、当然で、何も珍らしいことはない。噂の種にもならないのだが、ドン百姓の源作が、息子を、市の学校へやると言うことが、村の人々の好奇心をそそった。

源作の噂^{うわさ}の、おきのは、隣家へ風呂^{ふろ}を買いに行ったり、念仏に参ったりすると、

「お前^{まへ}とこの、子供は、まあ、中学校へやるんじゃないかな。銭^{ぜに}が仰山^{おほやま}あるせになんばでも入れたらえいわいな。ひひひひ。」と、他の内儀^{うちぎ}たちに皮肉^{かわく}られた。

二

おきのは、自分から、子供を受験にやっとなとは、一と言も喋^{しゃべ}らなかった。しかし、息子の出発した翌日、既に、道辻^{みちつじ}で出会った村の人々はみなそれを知っていた。

最初

「まあ、えら者にしようと思うて学校へやるんじゃないやあろう。」と、他人か

彼はそういう人々に対して、頭を下げねばならなかった。彼はそういう人々の支配を受けねばならなかった。そういう人々が村会議員になり勝手に戸数割^{こどごわり}をきめているのだ。

百姓たちは、今では、一年中働きながら、儲^{もう}えなければならぬようになった。畠^{はたけ}の収穫物の売上げは安く、税金や、生活費はかさばって、差引き、切れこむばかりだった。そうかといって、醤油屋の労働者になっても、仕事がいなくて、賃銀は少なかった。が今更、百姓をやめて商人に早変わりすることも出来なければ、醤油屋の番頭になる訳にも行かない。しかし息子^①を、自分がたどつて来たような不利な立場に陥れるのは、彼には忍びないことだった。

二人の子供の中で、姉は、去年隣村へ嫁^{よめ}づけた。あとには弟が一人残っているだけだ。幸い、中学へやるくらい金はあから、市で傘屋をしている従弟に世話してもらって、安くて通学させるつもりだった。

「具合よく通つてくれりゃえいがなあ。」と彼は茶碗を置いて云った。

「そりゃ、通るわ。一年からずつと一番ばかりでぬけて来たんじゃないもの。」と、おきのは源作の横広い頭を見て云った。胡麻塩^{ごましお}の頭髪は一ヵ月以上も手入れをしないので長く伸び乱れていた。

「いいや、それでも市に行きやえらい者が多いせにどうなるやら分らない。」

「毎朝、私、観音様にお願を掛けよるんじやものきつと通るわ。」

② 源作は、それには答えなかった。彼は、息子が中学を卒業して、高等工

ら云われると、おきのは、肩身が広いような気がした。嬉しくもあった。

「あんた、あれが行たんを他人に云うたん？」と、彼女は、昼飯の時に、源作に訊^きねた。

「いいや。俺は何も云いやせんぜ。」と源作はむしむしした調子で答えた。

「そう。……けど、早や皆な知つて了^しうとら。」

「ふむ。」と、源作は考えこんだ。

源作は、十六歳で父親に死なれ、それ以後一本立ちで働きこみ、四段歩^{よんだいふ}ばかりの畠と、二千円ほどの金とを作り出していた。彼は、五十歳になっていた。若い時分には、二万三万円の金をためる意気込みで、喰い物も、ろくに食わずに働き通した。しかし、彼は最善を尽して、ようやく二千円たまったが、それ以上はどうしても積りそうになかった。そしてもう彼は人生の下り坂をよほど過ぎて、精力も衰え働けなくなつて来たのを自ら感じていた。十六からこちらへの経験によると、彼が困難な労働をしてわずかずつ金を積んで来ているのに、醤油屋や地主は、別に骨の折れる仕事もせず、沢山の金を儲けて立派な暮らしを立てていた。また彼と同年だった、地主の三男は、別に学問の出来る男ではなかったが、金のお蔭で学校へ行つて今では、金比羅^{こんぴら}さんの神主になり、うまうまと他人から金をまき上げていた。彼と同年輩、または、彼より若い年頃の者で、学校へ行っていた時分には、彼よりほど出来が悪かった者が、少しよい勉強をして、読み書きが達者になったために、今では、醤油会社^{しょうゆかいしゃ}の支配人になり、醤油屋の番頭になり、または小学校の校長になって、村でえらばっている。そして、

業へ入って、出ると、工業試験場の技師になり、百二十円の月給を取るのを想像していた。

三

市の従弟から葉書が来た。息子は丈夫で元気が好いと書いてあった。県立中学は、志願者が非常に多いと云つて来た。市内の小学校を出た子供は、先生が六ヵ月前から、肝煎^{かんせん}つて受験準備を整えている上に、試験場でもあわてずに落ちついて知つて居るだけを書いて出すが、田舎から出て来た者は、そういう点で二三割損をする。もっとも、この子はよく出来るというところだから、通ることは通るだろうが、と書いてあった。

「通つたらえらいものじゃがなあ。」源作は、葉書を嚔^{ささや}に読んできかせた後、こう云った。

「もっと熱心にお願をするわ。」

こういうことを、神仏に願つても、効くものでない、と常々から思っている源作も、今は、妻の言葉を退ける気になれなかった。

源作が野良仕事に出ている留守に、おきのの叔父が来た。

「そちな、子供を中学校へやつたと云うじゃないや。一体、何にする積りどいや。」と叔父は、磨^こりちびてつるつるした縁側に腰を下して、おきのに訊ねた。

「あれを今、学校をやめさして、働きに出しても、そんなに銭はとれず、そうすりゃ、あれの代になつても、また一生頭が上がりずに、貧乏たれで

暮さにならんせに、今、ちいと物入れて学校へでもやっというてやったら、また何ぞにならうと思つていない。」と、おきのは答えた。

「ふむ。そりや、まあえいが、中学校を上ったつて、えらい者になれやせんぜ。」

「うちの源さん、まだ上へやる云いよらあ。」

「ふむ。」と、叔父は、暫らく頭を傾けていた。

「庄屋の旦那が、貧乏人が子供を市の学校へやるんをどえらい嫌うとるんじやせにやつても内所^{うちどころ}にしかにやらんぜ。」と、彼は、声を低めて、しかも力を入れて云った。

「そうかいな。」

③「誰ぞに問われたら、市へ奉公にやつたと云うとくがえいぜ。」

「はあ。」

「ようく、気をつけにやらんぜ……。」と叔父は念をおした。そして、立つて豚小屋を見に行った。

「この牝^{メス}はさかずか肥えるじやないかいや。」

親豚は、一ヵ月程前に売つて、仔豚のつがいだけ飼っている。その牝の方を指して叔父はそう云った。

「はあ。」と、おきのは云つて、彼女も豚小屋の方へ行った。

「豚を十四ほど飼うたら、子供の学資くらい取られんこともないんじやがな、……何にせ、ここじや、貧乏人は上の学校へやれんことにしとるせに、奉公にやつたと云うとかにやいかんて。」と、叔父は繰り返した。

をきくと、源作に十二分の原因があつて、簡単、明瞭で、他から文句を云う余地はないように思われた。

四

試験がすんで、帰るべきはずの日に、おきのは、停車場へ迎えに行った。彼女は、それぞれ試験がすんで帰ってくる坊っちゃんたちを迎えに行つて、いる庄屋の下女や、醤油屋の奥さんや、呉服屋の若旦那の眼につかぬように、停車場の外に立つて息子を待っていた。彼女は、自分の家の地位が低いために、そういう金持の間に伍することが出来ないように、自から、卑下していた。そして、また、実際に、汚いドン百姓の噂と見下げられていた。

やがて、汽車が着くと、庄屋や、醤油屋や、呉服屋などの坊っちゃんたちが降りて来た。

「お母あさん。」と、醤油屋の坊っちゃんは、ブラットホームに降りると、すぐ母を見つけて、こう叫びながら、奥さんのいる方へ走りよつた。片隅からそれを見ていたおきのは、息子から、こうなれなれしく、呼びかけられたら、どんなに嬉しいだろうと思つた。

「坊っちゃんお帰り。」と庄屋の下女は、いつもほかかと口を開けている、少し馬鹿な庄屋の息子に、叮嚀^{ていれい}にお辞儀をして、信玄袋^{まげぶくろ}を受け取つた。

おきのは、改札口を出て来る下車客を、一人一人注意してみたが、彼女の息子はいなかった。確かに、今、下車した坊っちゃんたちと一緒に、試

おきのは、叔父の注意に従つて、息子のことを訊ねられると、傘屋へ奉公に出たと云つた。しかし、村の人々は、彼女の言葉を本当にしまかつた。でも、頑固^{がんこ}に、「いいえいな、家に、市の学校へやつたりするかいしょうがあるもんかいな。食うや食わずじやのに、奉公に出したんにきまつたら。」と、彼女は云い張つた。

が、人々は却つて皮肉に、

「お前んとこにや、なんぼかこれがと拇指^{おやぎさき}と示指^{さしゆび}とで円^{まる}るものをこしらえて、」あるやら分らんのに、何で、一人息子を奉公やかいに出したりすらあ！学校へやつたんじやが、うまいこと嘘をつかあ、……まあ、お前んとこの子供はえらいせに、旦那さんにでもなるわいの、ひひひ……」

おきのは、出会^{であ}した人々から、嫌味を浴せかけられるのがつらさに、「もういっそ、やめさして、奉公にでも出すかいの。」と源作に云つたりした。

「奉公やかい。」と、源作は、ちよつと冷笑を浮べて、むしむしした調子で、「己等^{おれら}一代はもうすんだようなもんじやが、あれは、まだこれからじゃ。少々の銭を残してやるよりや、教育をつけてやつとく方が、どんなけになるやら分らせん。村の奴等が、どう云おうがかもうたこつちやない。庄屋の旦那に銭を出して貰うんじやなし、俺が、銭を出して、俺の子供を学校へやるのに、誰に気兼ねすることがあるかい。」

おきのは、叔父の話をきいたり、村の人々の皮肉をきいたりすると、息子を学校へやるのが良くないような気がするのだったが、源作の云うこと

験がすんで帰つて来るはずだった。村をたつて行つた日は違つていたが、学校は同じだった。彼女は、乗り越したのではあるまいかと心配しながら、なお立つて、停車場の構内をじろじろ見廻した。

「僕、算術が二題出来なんだ。国語は満点じや。」醤油屋の坊っちゃんは、あどけない声で奥さんにこんなことを云いながら、村へ通じている県道を一歩先に歩いた。それにつづいて、下車客はそれぞれ自分の家へ帰りかけた。

「谷元は、皆な出来た云いよつた。……」こういう坊っちゃんの声も聞えた。谷元というのは源作の姓である。

おきのは、走りよつて、息子のことを、訊ねてみたかったが、醤油屋へ、良人の源作が労働に行つていたのを思い出して、なお卑下して、思い止まつた。

停車場には、駅員の外、誰もいなくなつた。おきのは、しおしおと、帰りかけた。彼女は、一番あとから、ぼつぼつ行つてゐる呉服屋の坊っちゃんに、息子のことを訊ねようと考えた。坊っちゃんは、兄の若旦那^{わがだんな}と、何事か——多分試験のことだろう——話しかつて笑つていた。あの話がすんだら、近づいて訊ねよう、とおきのは心で考えた。うっかりして乗り越すようなあれじやないが、……彼女は一方でこんなことも思つた。

若旦那の方に向いて、しきりに話している坊っちゃんの顔に、彼女は注意を怠らなかつた。そして、話が一寸中断したのを見計らつて、急に近づいて、息子のことをきいた。

「谷元はまだ残つると云いよった。」と、坊っちゃん、彼女に答えた。
「試験はもうすんだんでござんしょうな。」
「はあ、僕等と一緒にすんだんじゃが、谷元はまだほかを受ける云いよった。」

「そうでござんすか。どうも有りがとうさん。」と、おきのは頭を下げた。彼女が若旦那に顔を見られるのが妙に苦しかった。

翌日の午後、従弟から葉書が来た。県立中学に多分合格しているだろうが、若し駄目だったら、私立中学の入学試験を受けるために、成績が分るまで子供は帰らせずに、引きとめている。ということだった。

「もう通らなんだら、私立を受けさせてまで中学へやらいでもえいわやの。家のような貧乏たれに市の学校へやって、また上から目角に取られて等級でもあげられたら困らやの。」と、おきのは源作に云った。

源作は黙っていた。彼も、私立中学へやるのだったら、あまり気がすすまなかった。

五

村役場から、税金の取り立てが来ていたが、丁度二十八日が日曜だったので、二十九日に、源作は、銀行から預金を出して役場へ持って行った。

もう昨日か、一昨日かに村の大部分が納めてしまつたらしく、他に誰も行っていなかった。収入役は、金高を読み上げて、二人の書記に算盤をおかしていた。源作は、算盤がひと仕切りすむまで待っていた。

と源作を見た。

源作は、びくびく唇を顫わした。何か云おうとしたが、小川にこう云われると、彼が前々から考えていた、自分の金で自分の子供を学校へやるのに、他に容喙されることはないという理由などは全く根拠がないように思われた。

「税金を持って来たんか。」

「はあ、さようで……」

「それそうじゃ。税金を期日までに納めんような者が、お前、息子を中学校へやるとは以ての外じゃ。子供を中学やかいへやるのは国の務めも、村の務めもちゃんと、一人前にすましてからやるもんじゃ。——まあ、そりゃ、お前の勝手じゃが、兎に角今年から、お前に一戸前持たすせに、そのつもりで居れ。」

小川は、なお、一と時、いかつい眼つきで源作を見つめ、それから怒っているようにぶいど助役の方へ向き直った。収入役や書記は、算盤をやめて源作の方を見ていた。源作は感覚を失つたような気がした。

彼は、税金を渡すと、すぐご役場から出て帰った。

昼飯の時、

「今日は頭でも痛いんかいの。」と、おきのは彼の憂鬱に硬ばっている顔色を見て訊ねた。彼は黙って何とも答えなかった。

飯がすんで、二人づれで畠へ行ってから、おきのは、

「家のような貧乏たれに、市の学校やかいへやるせに、村中大評判じゃ。

「おい、源作！」

ふと、**A**、太い、力のある声が出た。聞き覚えのある声だった。それは、助役の傍に来て腰掛けていた小川という村会議員が云ったのだ。

「はあ。」と、源作は、小川に気がつくかと答えた。小川は、自分が村で押しが利く地位にいるのを利用して、貧乏人や、自分の気に食わぬ者を困らして喜んでいる男であつた。源作は、頼母子講を取った、抵当に、一段二畝の畑を書き込んで、その監査を頼みに、小川のところへ行つた時、小川に、抵当が不十分だと云って頑固にはねつけられたことがあつた。それ以来、彼は小川を恐れていた。

「源作、一寸、こっちへ来んか。」

源作は、呼ばれるまゝに、恐る恐る小川の方へ行つた。

「源作、お前は今度息子を中学へやつたと云うな。肥つた、眼に角のある、村会議員は太い声で云った。

「はあ、やってみました。」

「わしは、お前に、たつてやんなとは云わんが、労働者が息子を中学へやるんは良くないぞ。人間は中学やかいへ行つちゃ生意気になるだけで、働かずに、理屈ばかりこねて、かえつて村のために悪い。何んせ、働かずにぶらぶらして理屈をこねる人間が一番いかん。それに、お前、お前はまだこの村で一戸前も持たらず、一人前の税金も納めとらんじゃぞ。子供を学校へやつて生意気にするよりや、税金を一人前納めるのが肝心じゃ。その方が国のためじゃ。」と小川は、ゆつくり言葉を切つて、じろり

始めつからやらなんだらよかつたのに。」と源作に云った。

源作は何事か考えていた。

「もう県立へ通らなんだら、私立へはやるまいな。早よ呼び戻したらえいわ。」

「うむ。」

「分に過ぎるせに、通つとっても、やらん方がえいじゃけれど……」とおきのは独言した。

暫らくして、

「そんなら、呼び戻そうか。」と源作は云った。

「そうすりゃえいわ。」おきのはすぐ同意した。

源作は畠仕事を途中でやめて、郵便局へ電報を打ちに行った。

「チビヨウキスグカエレ」

いきなりこう書いて出した。

③ 帰りには、彼は、何か重荷を下したようで胸がすつとした。

息子は、びくくりして十一時の夜汽車であわて、帰って来た。

三日たつて、県立中学に合格したという通知が来たが、入学させなかつた。

息子は、今、醬油屋の小僧にやられている。

(黒島伝治『電報』による)

- 注1 市の中学校——旧制中学校のこと。
- 注2 一戸前——村落での社会的権利・義務を表す語。等級として一戸前、半戸前、四半戸前などがある。
- 注3 四段歩——段は反に同じ。段歩はこの場合段のこと。田畑の面積を表す語。一段は、約九九〇平方メートル。一段十畝。
- 注4 戸数割——一戸を構える者、または一戸を構えなくとも独立の生計を営む者に課した地方税。
- 注5 信玄袋——布製の手さげ袋。平底で、口をひもで締める。
- 注6 目角——鋭敏な目つきのこと。この場合、反抗的な目つき、態度の意。
- 注7 頼母子講——無尽とも。講の組織による民間の金融組合の一種。
- 注8 一段二畝——注3に同じ。
- 注9 容喙——横から口出しをすること。

※本文中には、現代では使用されていない表現が用いられているが、原文を尊重し、原文通りの記載とした。

- 8 傍線部①「息子を、自分がたどって来たような不利な立場に陥れるのは、彼には忍びないことだった」からどのようなことが読み取れるか最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ⑤ 源作は、おきのとはい違い観音様に願を掛けるのではなく、もっと効果のある別の方法を考えていた。

- 10 傍線部③「誰ぞに問われたら、市へ奉公にやったと云うとくがえいぜ」はおきの叔父の言葉だが、その解釈として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 叔父は、庄屋の旦那のことを考え、おきのは息子を中学校へ進学させるのでなく奉公させるべきだと考えている。
- ② 叔父は庄屋の旦那の考え方をよく知っており、おきの息子が中学校に進学した場合、自分にとって不都合な事態が生ずることを恐れている。
- ③ 庄屋の旦那のことを考えると、叔父はおきのが当面息子は奉公に出したと周りに言っておいた方が安全だと考えている。
- ④ 庄屋の旦那におきの息子が中学校に進学したことが知られたら、本人の卒業後の就職に差し支えることを心配している。
- ⑤ 叔父は庄屋の旦那の考えにも一理あると思っており、おきには息子を奉公に出すと言っただけで考えている。

- 11 空欄 A に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 源作は、息子は自分と違って頭がよいので、中学校に進学させ、自分より立派な百姓として人生を送らせたいと考えていた。
- ② 源作は、息子に自分の果たせなかった中学校への進学を実現させることで、息子が自作農としても成功できると考えていた。
- ③ 源作は、息子を中学校に進学させることで、息子が人から見下されるのではない人生を歩めるのではないかと考えていた。
- ④ 源作は、息子に自分と同じ小作人としての人生を送らせたくなかったため、中学校へ進学させたいと考えていた。
- ⑤ 源作は、息子に学問をつけさせることで、息子が人間として立派に成長し、自分に果たせなかった夢を託せると考えていた。

- 9 傍線部②「源作は、それには答えなかった」とあるが、源作の心情の解釈として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 源作は、おきのように観音様に願を掛けてまで息子を中学校に合格させたいとは思っていなかった。
- ② 源作は、おきのが観音様に願を掛けることを嫌っており、息子は実力で中学校に合格すると信じていた。
- ③ 源作は、おきのように観音様に願を掛けてでも息子を中学校に合格させたいと考えはじめていた。
- ④ 源作は、おきのとはい違い観音様に願を掛けても息子の中学校の試験

- ① かんたかい
- ② しわがれた
- ③ くぐもった
- ④ とんきょうな
- ⑤ しわぶいた

- 12 傍線部④「小川にこう云われると、彼が前々から考えていた、自分の金で自分の子供を学校へやるのに、他に容喙されることはないという理由などは全く根拠がないように思われた」とあるが、その解釈として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 源作は息子を自分の金で中学に入れてどこが悪いのかと考えているが、税金に関し村会議員の小川の言葉に返すべき正当な根拠を探そうと困っている。
- ② 村会議員の小川の言葉はきわめて高圧的なもので、源作はそれに憤りを覚えており、税金のことで小川の言葉の言いなりになる理由はどこにもないはずだと考えている。
- ③ 村会議員の小川の言葉は正当性のない個人的意見に過ぎないと源作は考えていたが、税金に関し法的な根拠があるとなると従わざるを得ないかと迷い出している。
- ④ 源作は自分の金で息子を中学に進学させることに自負を持ってい

たが、村会議員の小川に税金のことで嫌がらせを受け、息子の進学のために始めている。

- ⑤ 村会議員の小川は源作に税金のことで不当な圧力をかけているが、源作にとって小川の言葉は絶対であり、息子の進学をあきらめさせなければと考え出している。

傍線部⑤「帰りに、彼は、何か重荷を下したようで胸がすつとした」

とあるが、それはどのような心理を表現しようとしたものか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 源作は息子が中学校に進学することを望んでいたが、これ以上村の有力者たちから嫌がらせを受けなくてすむと思い、すつとした。
② 源作は息子を中学校に進学させるだけの金銭的な蓄えは持っていたが、息子自身が進学を望んでいたわけではなかったため、すつとした。
③ 源作は息子に中学校への進学をあきらめさせたことにより、もうこれで経済的に無理をしなくてもよいと思い、すつとした。
④ 源作は息子が中学校へ進学することに内心では納得していなかったため、これで村の有力者にも嫌われずにすむと思い、すつとした。
⑤ 源作は息子をできれば中学校に進学させたいと望んでいたが、本人にとって必ずしも得になる保証もないので、止めさせてすつとした。

た。

⑭ 本文から読み取れる当時の社会状況として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 村の有力者である庄屋や村会議員、醤油屋などは、多くの場合学歴も高く優秀で、農民に対し常に擁護者の立場を取っており、農民はそれを受け入れなければならない状況。
② 庄屋や村会議員、醤油屋などが権力を持っているのは、税金を納めているからで、税金をまったく納めていない農民は常に社会的に弱い立場に追いやられている状況。
③ 庄屋や村会議員、醤油屋などは、肉体を酷使し労働してお金を稼ぐことがなく、農民のような肉体を酷使する労働に対し、内心後ろめたない気持ちで生活している状況。
④ 高い税金を納めている庄屋や村会議員、醤油屋などは、常に社会的に特権的な立場にあり、一戸前の税金を納められない立場の農民はそれに反感を抱いており、闘争せざるを得ない状況。
⑤ 庄屋や村会議員、醤油屋といった村の有力者は、自分たちの支配者層としての立場を維持するため、農民の子息が学問をすることを望まず、押さえつけておきたいという状況。

三

次のA～Cのそれぞれの設問に答えなさい。

A ⑮～⑲の各文のカタカナの傍線部を漢字に改めたとき、傍線部がそれと同じ漢字を含むものを、それぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

- ⑮ 職場のコウキ肅正を目標とする。
① 謝罪のキカイが与えられた。
② 将来に大きなキボウを抱く。
③ 母国である日本にキチャクする。
④ 大学院のコウキ課程に進学する。
⑤ 「日本シヨキ」は奈良朝に作られた。

- ⑯ 人並はずれたドウサツ力がある。
① お寺のドウナイを参詣する。
② ジツドウ時間を計算する。
③ 海底ドウクツの中は涼しい。
④ 志望のドウキを明確にする。
⑤ A Iのドウニウにより改善された。

⑰ 髪に栄養をシントウさせる。

- ① 大工のトウリョウに学ぶ。
② 議会でトウベンを行う。
③ ある集団をトウソツする。
④ トウメイ人間に出会う。
⑤ 国民トウヒョウで決着させる。

⑱ 状況に応じてゼンシヨする。

- ① 忌まわしい事件のゼンシヨを探る。
② その仮説はガイゼン性が乏しい。
③ ゼンタクの判断が難しい。
④ お寺でザゼンを行う。
⑤ つらくてもゼンシヨあるのみだ。

⑲ この作品は日本文学にテンキョしている。

- ① わかりやすいサイテン基準を設ける。
② 卒業式のシキテンの準備で忙しい。
③ テンサイから身を守る備えをしている。
④ 思いがけず事態はコウテンした。
⑤ テンボを借りて花屋を開く。

B [20] ~ [22] の各文の意味をもつ表現はどれか。最も適切なものを、次の① ~ ⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

[20] 自然の景色が特に美しいこと。

- ① 山紫水明(さんしすいめい)
- ② 落花流水(らっかりゅうすい)
- ③ 月下氷人(げっかひょうじん)
- ④ 一刻千金(いっこくせんきん)
- ⑤ 明鏡止水(めいきょうしすい)

[21] 仕事や勉強に打ち込み一生懸命努力するさま。

- ① 韋編三絶(いへんさんぜつ)
- ② 百家争鳴(ひゃっかそうめい)
- ③ 前人未踏(ぜんじんみとう)
- ④ 風林火山(ふうりんかざん)
- ⑤ 粉骨碎身(ふんこつさいしん)

[22] 同じ仲間の中で最も優れているもの。

- ① 白眉
- ② 蛇足
- ③ 逆鱗
- ④ 鳥合
- ⑤ 虎穴

C 次の文章の空欄 [23]・[24] に当てはまるものとして最も適切なものを、それぞれ後の① ~ ⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

雑誌「白樺」創刊号に小説「網走まで」を発表した [23] は、厳しい倫理観と強烈な自我の持ち主で、簡潔な描写によるリアリズム手法によって、その後も多くの優れた作品を発表した。「白樺」同人の作家に [24] がある。

[23]

- ① 武者小路実篤
- ② 志賀直哉
- ③ 国木田独步
- ④ 島崎藤村
- ⑤ 田山花袋

[24]

- ① 永井荷風
- ② 谷崎潤一郎
- ③ 芥川龍之介
- ④ 佐藤春夫
- ⑤ 里見弴